昭和62年9月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 19

ふるさと

丹宗 朝子

「御郷里はどちらですか」。聞かれる度にさて何と答えようかと一瞬とまどうのは、外地で生まれ育ったからだろうか。

「郷里・ふるさと」は、広辞林によれば、①自分が生まれたもとの地②前に住んでいた土地、または前にしばしば行ったことのある地を指すという。

①の意味であれば、中国の東北部の旧大連で生まれ、旧南満洲で育った私にとっては、アカシヤやポプラ並木の美しい彼の地がなつかしいふるさとである。私の通っていた小学校は、中に小川や山があり、山上に野外教室があるという広い学校だった。夏には山でキャンプをし、山から山へ肝試しに行き、冬になると運動場でスケートをし、近くの山で兎狩りもするというへうさぎ追いしかの山…という歌そのものの、のびのびとした心豊かな小学校生活だった（もっとも、今は中国の方達には申し訳なかったと思っている）。

別れてしまったかつての子供達が、はじめて再会したのは昭和五十四年浜松であった。何度か回を重ね、今秋は京都でまた集いが持たれる。彼の地は、ただひたすらになつかしく想うばかりのふるさとである。

「流れ」入交京子

だが、私にとってのふるさとはそれにとどまらない。引き揚げてから長い間を過ごした先祖からの故郷である福岡県、その後それぞれ十年程を過ごした北海道と関西（道産子の長男にとって札幌はまさにふるさとである）、いずれも想い出が多く、なつかしい②のふるさとである。

そうして高知。思いがけず高知に住み始めて半年になる。抜けるように青い空と海、緑の多い山、美しい星空、激しい雨、気性ははげしいがさっぱりとして暖かい人情、はじめての所長職についた私にとってこの街も忘れ難い想い出のふるさとになりそうである。

高知で生まれ育って県外で活躍する方達がかなり多いと聞いている。その方達にとって高知はなつかしい大事なふるさとである。その方達にとっても、またこの地で暮らしている方達にとっても、この街が住みよい、更に、よさこい祭の踊りのように活気のある街になり、なつかしいふるさととして何時までも愛されるように、皆で情熱を傾けて努力をしたいものである。

（高知地方裁判所・家庭裁判所所長）

バンザイであります

岩本　久則

高知県は日本で一番多く、漫画家が輩出されている県であります。まるで西瓜やヤマモモのように漫画家が多く採れるところなのであります。

なぜ漫画家がかくも多く採れるのか、土壌が適しているのかそれとも気候風土が適しているのか、と考えるのであります。

どうやらこれは「イゴッソ」が大きく関係しているに違いない、そう思われるのであります。つまり、土佐人の性格、文化が影響しているのであります。

何か言うと反射的に反対する、それからその理由を考えて〝もがる〟、あの性格が漫画の発想に役立っているのだろうと思うのであります。こう書くと即座に「違う」と言われそうなそのステキな性格が適しているのであります。

そう、既に貴方も「根」は漫画家なのであります。

「イゴッソ」は、水平思考でありまして、一旦否定して、改めて白紙にしてから考える。これを小さなうちから繰り返していると、この一連の作業が瞬時に行われるようになります。これが他県の人から見ると、ユニークな発想、てなことに写るのであります。いやいや確かにユニークな発想になるのでありまして、これが取りも直さず創作に携わる者にとっては「命」ともなり「財産」ともなるのであります。

最近びっくりするような出来事がありました。私事で恐縮でありますが、先日高知で展覧会をやりました。漫画の展覧会での鉄則は、「案（アイディア）」を入れた作品は喜ばれないものだということであります。特に絵を求める人にとっては、可愛いとか綺麗とかが絶対の条件で、家に飾っておくのですからそうなるのでしょう。ですから、作品を手放す展覧会では「案」を入れてはいけない。そう言われているのであります。

もっともアメリカなどでは、「案」のあるほうが喜ばれていて、値段も高いのですが。

私は毎年原宿の画廊で展覧会をやっているのですが、誰も「案入り」を求めないのであります。「アン入りだよーっ」と日曜市の餅屋のようなことを言っても駄目であります。

ところがなんと、高知の展覧会で求められた大半が「アン入り」でありました。私は驚いたのであります。東京で仲間にその話をしたら「流石は高知だなァ」でありました。

ところで、この「イゴッソ」の反骨精神とユーモアは、何によって培われたのでありましょうか。てなことは文化人類学のセンセイにおまかせするとして、ともかく歴史や気候風土と無関係とは言えないのであります。言えたとしても、今はなんとかこじつけようとしているのでありますから、言えないことにしてもらわないと都合が悪いのであります。

つまり、高知の「漫画精神」は、気候風土、そう、自然と無関係ではないのであります。高知の自然が漫画を作るのであります。（ひどい飛躍ですが、このページの依頼が、高知の自然をテーマにしろということなので、やっとここまでたどり着いたのです。）

だから自然を大切にしなくてはならないのであります。（余りにも露骨ですか。）

しかし、考えてみると高知は自然を食い、自然で食い、自然がご馳走であることは誰とて異論の無いところでしょう。その自然が人を育み、「イゴッソ（漫画精神）」を育てるのであります。

自然と言うご馳走は、放って置けば置くほど価値が上がるご馳走で、日本中が開発にやっきになり、コンクリートで埋め尽くされると、高知の自然は益々熟成し、美味くなります。言うならば定期預金に複利で利子がつくのであります。

やがて、日本中の精神科医は処方箋に「高知に行け」と書きます。かくして高知の精神土壌はさらに確立され、心身共に日本中で最も豊かな県になるのであります。

目出たし目出たし。バンザイであります。

（漫画家）

渓流で会った人

窪内　隆起

育った環境もあって、アメゴ釣りは小学校に入る前からやっていた。最近は養殖と放流が盛んになったため、野性の天然ものが少なくなって釣りの興味が半減した。それでも、渓流の興趣を楽しむことを主眼に、時々は出かけている。

アメゴ釣りは早春のものである。渓流の岩かげで、残雪を押し上げるように頭をもたげている蕗のとうや、水しぶきを受けて艶やかに緑をしたらせているわさびの葉や、可憐な白い花を見ながらの谷歩きは格別である。

ところが、次第に苦痛になってきたのが、視力の弱りである。切れた糸を結ぶ時が大変である。

一昨年の春、伊尾木川の上流に行った時。その時も切れた糸を釣針に結ぶのに四苦八苦していた。糸を釣針に巻いて、小さな輪を作り、それに糸の一端を通して引き締める方法なのだが、近くの小さいものが見えにくいため、うまくいかない。最初は川岸に立ってやっていたが、そのうち岩に腰を下ろして悪戦苦闘の末、やっと結び終えた。

「目が遠うなると、お互いに苦労ですなあ」

ほっとして立ち上がりかけたところへ、うしろから声がかかった。

私と同年輩の釣人が近付いて来た。川で時々顔を合わせる人であったが、親しく話をしたことはなかった。

「半時間ほど、もたもたしてました」

「うまく結べましたか」

「ええ、やっと」

そんな会話を交わしてその人と別れたが、別れ際にその人は、

「来週も来ますか」

と訊いて来た。

「日曜日に来るつもりです。こんどは家で予備をどっさり作って来ますよ」

釣針を結んだ部分、つまりハリスを家で充分に作り、次の日曜日に私はまた伊尾木川に行った。

ある瀬のほとりに立って流していると、川岸に迫っている背後の林の中から、その人が下りて来た。

「いやあ、手を止めてすみません。道路からあんたが見えたもんですから」

そう言いながら近寄って来るとその人は、背負っていたリュックサックから、虫眼鏡を一つ取り出した。

「これを、使うてみて下さいや」

と、私に差し出した。小さな虫眼鏡に、二十センチほどの針金がついていた。

「こうして使うと、便利ですよ」

その人は自分のジャンパーのポケットからもう一つ虫眼鏡を取り出した。そしてその虫眼鏡の針金の一端を口にくわえた。

「糸を結ぶのに、楽ですよ」

針金をくわえたままそう言い、はじめの虫眼鏡をまた私の方に差し出した。それを受け取り、その人と同じように針金の一端をくわえてみた。

そうすると、虫眼鏡がちょうどよい位置にあって、掌の皺もはっきりと見える。改めて虫眼鏡を見た。針金でうまく固定してある。

「使うて下さいや。ふだんは針金を曲げて、ポケットに入れておけばいいですよ」

先週、糸を結ぶのに四苦八苦していた私を見て、これを作ってきてくれたという。有難くそれを頂戴した。

しばらく二人で立ち話をし、私は私なりに工夫した仕掛けを差し上げた。

それだけのことであるが、その日はそのあと、なぜかアメゴがよく釣れた。糸を結ぶのに苦労しなくなったこともあるが、同好の他人のために、わざわざ便利な道具を作ってきてくれるその人の好意と、素朴な情がこちらにも乗り移って、ゆったりした気分で釣りの興趣にひたることが出来たからであろう。

釣果を追う余り、他人の竿の下を平気で通るような釣人も居るが、こんな釣人も居る。

（テレビ高知取締役報道制作局長）

作画の旅

大平　武夫（文・画）

再出発のために

だれでもそうであろうが、高知のわが家ほど居心地のいい場所はない。となりに住む小三の孫のキャッチボールをする姿や、朝夕に「行ってきます」「ただいま」という声が聞こえてくるだけでここは天国である。

そんな私がここ数年、妻と二人でヨーロッパや北海道と遠い所ばかり歩き回るのはひたすら作画のためにほかならない。数カ月、或いは一カ年と旅をすると、日本の治安のよさ、高知の人情のあたたかさ、家族への想いに身をつまされる。

国外では、ことばや生活習慣もちがい、健康のこと等気苦労が多い。それだけに思い出は常に新鮮であり、描きためた絵の一枚一枚にもそのときどきの感動がそっくりそのままし み込んでいる感じだ。

とりわけ、昭和五十七年五月からの一回目のパリへの旅は、退職直後の再出発という意味で意義も大きかったと思っている。

美術館や個展をめぐって

私たちのアパートは、セーヌ河の左岸にあってノートルダム寺院やルーヴル美術館にも近く便利だった。国・市立の美術館は水曜と日曜が入場料無料とか半額とかの取り扱いだったのでその日を美術館の日と決め、ひとまず十四の美術館を一巡した。あとは、ポンピドーセンターや近代美術館、ルーヴルの三階などを中心に足を運んだ。各々の美術館では特別企画展も催され、ポンピドーのブラック回顧展、ルーヴルのドラクロア展等は印象が強かった。近代美術館ではアメリカ表現主義作家ジョアニー・ミッチェル展が開かれていて、その規模の大きさと大胆な作風に魅せられ、延べ四十日も通いつめたものだ。

グランパレ美術館では春にル・サロン展、秋にはサロンドウトンヌ展が開かれ私もブローニュの森をバックに描いた「林と馬たち」を出品した。また国際絵画展や近代美術館では世界各国の若い画家が競うビエンナーレも開催中であった。

パリにはその他大小さまざまの画廊があって個展や作家紹介が盛んである。サントノーレ通りには、日動・梅田・ためながが・三越などの日本の画廊も軒を並べている。

日本の美術展の期間期日に比べて、パリの公立館では半年間、個展でも一カ月という長い期間開かれる。町々の店の入口などに展覧会のポスターがはられていて、催し物の場所や期間が沢山の人の目にとまるよう工夫されている。

ポンピドーセンターは夜間十時まで開かれていて、勤務を終えた人達も十分芸術が鑑賞できるようになっている。日曜水曜は入場料が無料で、週休二日制（日・水）のパリの小学生が親に連れられて静かに名画を鑑賞している姿を見かけた。幼い時からこのような芸術的環境の中で育てられているパリの子どもたちである。

個展や美術館などでの作品評価の視点は、○自分が好きであること ○個性的であること―等に徹し、評論家やマスコミの目、画歴など一切不問で、作家も自分のしたい仕事をのびのびと表現しているという感じだ。

林と馬たち

私も美術館をめぐり多くの名画との出合いを深める中で、○大地から風が吹き通るような絵を描こう ○小事にとらわれないで自分の絵を追求しよう ○一にも二にも三にも勉強だ―と自問自答を繰り返した。

ゴッホの墓に詣でて

パリでの一番の思い出は、ファン・ゴッホの墓参りだ。丁度お彼岸の頃で、先輩友人の四人でオワーズ河のスケッチに出かけた折のことだ。彼の死ぬ一カ月程前に描いたというあの有名なオーヴェールの教会から少し登った広い麦畑の墓地に、彼は弟テオと並んで眠っている。丘の下には小さな町があり、一軒のキャフェの三階に彼のアトリエが残されている。せいぜい六畳そこそこの暗い三角形の部屋には、彼の汗のしみた机と小さな椅子、使い古されたベッドが置かれていて小さな窓からさし込む光に浮き出されていた。

私がゴッホの名前を初めて聞いたのは小学校二年生の頃である。当時の校長先生から耳をそいだ画家ゴッホの話を聞き、一枚の教会の絵を見せてもらった。その時子供ごころにも深く感動したことを覚えている。

あれから五十余年、私の体の中にはずっとゴッホが生きつづけていたようだ。

ゴッホの名作は、印象派美術館やロダン美術館で多く観ることができ感銘も深かったが、彼の墓参をし、彼が生命を絶ったというアトリエをたずねることで、更に炎の画家ゴッホを深く知ることができた。

終わりに

私が足を多く運んだ場所は、セーヌ河畔、北の運河、モンマルトルの丘、ムフタール通りなどであったが、パリにはどこを向いても絵になる美しさがあった。

ユトリロやスーラ、ブラマンクたちが好んで描いた場所に行き当たることもあって深く感動を覚えたものだ。

このような風景との対話、名画の中からの語らいはパリならではのことで、私もいつのまにか自分の絵に向かって話しかける楽しさを知るようになった。

「画家をめざすものは、いつまでもハングリーでなければならない」ということをパリの先輩画家たちからしばしば聞かされたことだが、自分のこれからは、自分の絵を描くことで生きるしるしを確かめねばならないと思っている。

（洋画家）

朗らかな朗読を目指して

國常　光正

このところ「朗読」に対する関心が高くなったのか、朗読テープがよく売れており、この種の講座・勉強会・朗読奉仕などに参加する人々も多くなっているという。

なるほど、先日開かれた高知市文化振興事業団主催『朗読を楽しむ―朗読公開講座（講師巌金四郎氏）』には、定員をはるかにオーバーする参加者があり、熱気ムンムンの講座が展開された。

私も朗読サークル「トネリコの会」の仲間達と参加し、聴かせて頂いた。その席で実際に本を読み指導を受けた人達の朗読の仕方には、今までのような独特のクセが少なく、総じて内容を素直に表現している人が多かった。確かにレベルは上がっており、朗読に対する関心が高いという事実をそこに見た思いであった。

辞書を引くと、【朗読】声高く読み上げること・声をあげて詩歌や文章を読むこと―などとあるが、当日巌さんが冗談めかして言った「朗読とは文字通り朗らかに読むこと」という説は、基本的に正しいと私も思っている。

私達が常日頃心がけ実行しているのは、①文章の内容・テーマを充分に理解、消化し自分なりのイメージを創る ②そのイメージを、自然な語りロ（日常会話の要領、呼吸）でより具体的に読み伝える ③言葉は明晰に、声はできるだけ大きく出す―といったもので、特に変わったことではない。

強いて留意点を挙げれば、①読もうとする本や文章を絶対に好きになる ②言葉や文章のもつ意味内容を無視して、強弱や高低の調子をとったり詠嘆調で読んだり、といった間違いを犯さないよう努力する―その程度のことである。

昨年トネリコの会では、「土佐民話の会」の市原麟一郎先生と、高知市内の図書館五ヵ所、県下の養護施設六ヵ所を訪問させて頂いた。先生の紙芝居と共に、童話・民話の朗読を通して、子供達からは有形無形の勉強をさせてもらった。今年も五月と七月に、潮江市民図書館の「紙芝居とお話し会」に参加した。市原先生や会員達と話し合い、夏休み明けには、施設の子供達と再会する予定である。

（朗読トネリコの会）

野良猫観察記

―その巧みな子育て法―

横矢　寛

私の家にしばしば野良猫が迷い込んで来る。迷い込むというより、ここなら危害は加えられないだろうと、目星をつけて居座るようである。

思い起こすと、私の生家ではよく動物を飼っていた。犬では、水中に投げた石を二メートルも潜って取って来たマリ、忠犬そのものだったポスが懐かしい。

猫では、十八才の老猫タマは夜億劫がって布団に度々お寝しょしたこと、トラの臨終には夜明け迄腹をさすって泣いたことなどを思い出す。

またタマが子を生むと、可哀想だが子猫の目が開かぬ内に、川に捨てなくてはならない。その役目は何時も子ども達であった。目をつむって川に投げ込む迄はよかったが、流れる新聞紙から子猫が飛び出し、ばたばたもがくと、どうにも見過ごすことが出来ず、助け上げて家にとって帰り、ひどく叱られたこともあった。

そんな私に輪をかけて家内も動物好きであるので、野良猫にとってここは安全であり、くみしやすい相手に見えるのかも知れない。

実に猫は、人間の性格なり猫に対する感情を敏感に見抜くものである。

＊

さて、野良猫がえさをねだると可哀想に思い、家の外で残り物を与える。猫は何日もかけて人間の態度や心情、信用性を観察し、安全を確認して住居を決めるらしい。

通称ミイケというめす猫が居座り、しばらくすると大きなお腹をかかえるようになった。やがて月満ち何処かで子どもを産み、子育てが始まったようである。

母猫ミイケは、子猫の小さいうちは絶対人間に見せないように隠して育てた。一度親猫の外出中を見計らって隣の空家の裏側迄さがしたが、子猫は息をひそめ所在はつかめなかった。

やがてミイケが帰り甘ったるい声で呼ぶと、何処からか子猫は集まりお乳の時間になるようである。人間が近づいたら、犬や猫が来たら「こうするのよ」ときちんと教えてあり、また子猫がそれをよく守るのには驚いた。

三カ月位は、親の完全庇護のもとの子育てだ。外敵に対しては、親は命を賭して戦う。人間が見ても怖そうな犬に敢然として飛びかかり、子猫のため必死になって戦うミイケを見て、母猫強しの感を何度か覚えた。

三匹の子猫は、母親の完全保護のもとに三カ月を無事に過ごすと、そろそろ生きるための食べる技術を教わるようになる。最初は盗み食いであるが、戸が開いていると、一声二声ニャオ、ニャオと泣いてみて、誰も居なければ台所で失敬という段取りだ。この「御免下さい」の挨拶はミイケだけのしつけであった。虫やとかげの捕え方、ねずみや鳥の捕り方の伝授は、実に巧妙を極める教え方である。まず親がやって見せる。子猫はうしろから学ぶ。場所・自分の位置・歩き方・待つこと・獲物との距離・決断等々、それは見ていて人間以上であった。こうした訓練を繰り返し繰り返し行い、生きる技術を徹底的に教え込んでいった。

四カ月を過ぎると、子猫は逞しくまた可愛らしくもなるが、ある日、親を先頭に子猫三匹を家の主人に見せに来た。いわゆる〝顔見せ〟である。親が私や家内の足に頭をすりつけて、精一杯の愛嬌を示す。子ども達も見習えと言わんばかりである。そして、子猫をしばらく私達の前で遊ばせる。そんなことを続けながら、子猫を「私同様可愛がってほしい」「えさをやってほしい」と売り込んでいることがよく分かる。人間対応への教育である。

しかし、どうも飼ってもらえないと察すると、今度は野良猫としての生き方を徹底的に教え込むようであった。八カ月もすると親離れの段階であろうか、親は子猫がじゃれたり、ねだったりすることを含めて、頼ることを拒否する。

親に近づこうとすると、フウッと息を吹き出して寄せつけない。一人立ちするよう突き離す。

そんな日々の後、通称コネと言う小猫一匹を残して、他の猫は消えてしまったのである。

しばらくして、私の家から一丁も向こうの民家あたりを住居としているミイケに出合った。

私達に一番なつき可愛がられているコネ一匹をそこに頼み、自らは今迄住みなれた住居を去るミイケの母親としての態度は、全く立派と言う外はない。その後時々ミイケに会うが、以前のように甘えようとしないのはなぜであろうか。

＊

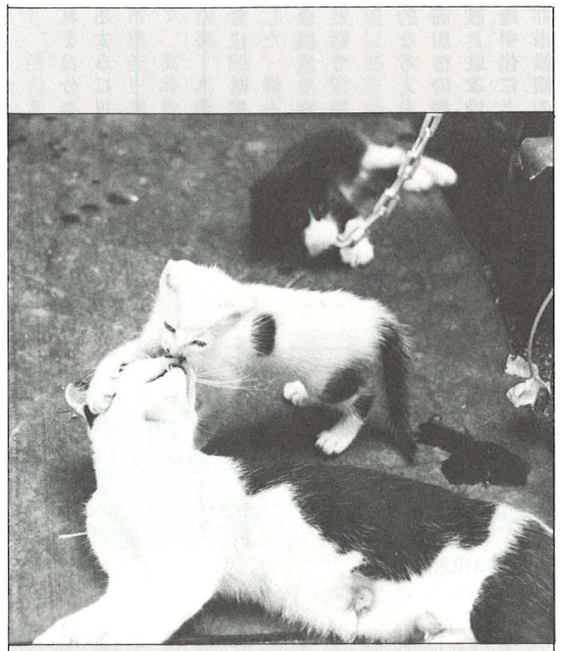
さて、一匹残ったコネは、今は子供を次から次へ産む母猫に育って居座っている。

子育てはなかなか上手であるが、ミイケに比較すると、母親としてやや格落ちの感がある。

現代っ子猫と言う感じで、子猫の教育もやや甘く毅然としたところがない。自分の食いぶちを子猫のために捨てて出て行ったミイケのような度量もない。

コネの最初の三匹の子チビ・クロベー・シロは、順調に大きくなって親ともどもえさをもらうようになったが、三匹ともどうも力強く育っていない。

あまえで、近所の猫に何時も追いかけられ、傷が絶えない弱虫である。親離れも、一人前の逞しさも養われていないように思う。



逞しく育つ子猫達

最近三匹の子猫のうちチビが姿を消し、クロベーとシロの二匹になっていたが、母猫のコネがまた子どもを産み、その子達の顔見せの時期になった。

面白いことに兄貴分のシロが時々小猫三匹のもりをしているのに出合うことがある。

犬や猫でも来れば、子猫をつれて何処かへ避難するし、安全な場所へつれて行って寝かしている。血のつながりを知っているようにも思えて来るし、母親に使われているとも見える。

近所に猫好きの中学生がいるので、クロベーとシロとどちらが好きかを尋ねると、シロが陰日向がないから好きだとのことである。なる程とうなずける点はある。クロベーは、要領がよく、あちこちの家庭へねだりに行くし、腹が張れば頭をすりつけてねだることもしない。シロは社交性がなく、特定の人以外にはなつかないが、その人には誠実であり、ここが八方美人のクロベーと違うところだ。

コネ、クロベー、シロは仲が良く、何時も一緒に寝ているが、敵に襲われた時はお互い助け合おうとしない。強敵ならそれぞれに逃げている。親離れがすまない子猫のためなら身体を張って敵に向かうコネも、もう一人前と認めればさっさと逃げるのである。「自分の身は自分で守れ」と言うことを徹底して教えているように見える。

今度生まれた三匹の子猫の名前はまだついていない。顔見せをしても売れそうにないが、親猫はどうする積もりであろうか。前のミイケならあちこちの町内へ売り歩くであろうが、現代っ子母親のコネは、そんな才覚も度量も力強さも決断力も弱い。

もう少しすると、また三匹ほど生まれて九匹にはなるだろう。我家でも近所の手前、そろそろ観察どころではなくなる。疎開や分散をどうするか、コネの力量に期待しつつも頭が痛い。

ただこの猫達は、自然の中で親の保護と教育、心の育みを受けて成長し、生きる力を身につけている。これからも餓死することはあるまい。

人間社会では、過保護の問題や反対に育てる責任を放棄する親もいる事が、大きな社会問題として取り上げられている。人の子育ては、猫君に負けてはなるまい。

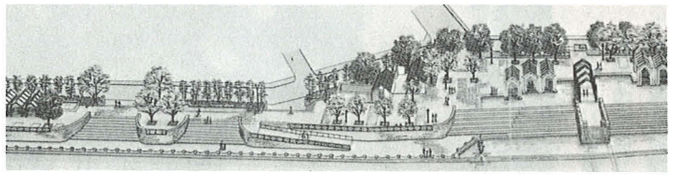
（元潮江小学校校長）

連載■〈街づくり〉の現在2

二十一世紀を目指す街づくり

―徳島からの報告―

久米　将夫
〔徳島市とくしま2001推進室研究員〕


新町川水際公園

はじめに、あるいは助走

徳島市は、高知市と同じく、昭和六十四年に市制一〇〇周年を迎える。市制施行当時は、阿波藍によって全国有数の都市として活況を呈し、阿波踊りとともに徳島らしさを存分に発揮していた都市・徳島だが、月並みな言い方をすれば、時代の波に置き忘れ去られてきた。

これからは、阿波藍の魂を蘇らせ、阿波踊りの情熱を持って、街の再生と復権をめざし、地域の持てる力を結集して新たな価値の創出を図らなければならない時期を迎えようとしている。

私が徳島の街づくりに、自治体職員として関わるようになった約八年間は、ちょうど徳島が未来に向かって新しい徳島づくりの目標と都市形成の方向を見定め、動きはじめた時と重なっているように思うので、その概略と街づくりに対する思いを述べてみたい。

徳島の街づくり（都市空間形成）の流れを自分なりに見た時、大きく分けて三つの転換期があるように思う。

まず第一歩は―ホップ

中心市街地に魅力と活力を与えるとともに、県都の玄関口としての良好な環境づくりを目的とした、都市型百貨店やホテルさらには公共施設も含め複合機能を有する徳島駅前再開発は、経済的衝撃力は当然として、都市環境形成の大きな契機であった。

一方、当時中心市街地整備計画の基本的な考え方であった二眼レフ構想の南の核となる、既存商店街の再活性化を図るための紺屋町の地下駐車場の建設と駐車場表層部の広幅員の歩行空間整備は、電線等の地中化によるシンボルロード整備事業として実施され、都市景観の向上という視点が導入されたという意味で画期的であった。

私自身は当時、身近な空間の整備を目的とした「うるおいのある街づくり事業」に取り組んでおり、都市空間の「質」が行政内部でも問われはじめたのである。

地元の建築士会の青年部が積極的に地域の街づくりに関わるようになったのもこの頃であり、徳島の環濠都市における水辺空間整備構想が提案された。

次の飛躍を―ステップ

六十年度まではさまざまな部門で計画実行された都市整備も、昭和六十一年度には、市民をはじめ多くの人々の参加を得て新しい総合計画の策定という形にまとめられた。そして未来に向かって飛躍し、新たな都市の魅力を創造する「はばたく光と水の都市・徳島」をめざし、創造的で活力のある徳島づくりに取り組むこととなった。

特に、中心市街地の活性化をめざした整備計画のなかでも、市民にうるおいとやすらぎを与え、新たな楽しみを育む魅力ある水辺環境の創造をテーマとした新町川親水公園化計画は、徳島の地形的特質をいかしたものであり、親水都市・徳島をめざすという方向性は、個性豊かな街づくりという潮流とも合致し市民からも共感をよんだのである。

しかし、いかに都市空間の整備を進めても本当に都市に活力が生まれなければ意味がないのではないだろうか。

都市環境の魅力ある条件をそなえた街の中に新しい産業が生まれる、言葉を換えれば新しい産業を都市が育てる段階にきているような気がする。

未来に向かって―ジャンプ

すでに、関西国際空港の建設、大鳴門橋に続く明石海峡大橋の着工、四国縦貫自動車道の建設、徳島空港の本格ジェット化などの種々のプロジェクトが推進されて地域には計り知れない波及効果をもたらそうとしている現在、徳島を取り巻く環境条件はかつてないほど変動しようとしている。

徳島市はこれらを積極的に受け止め、逆に都市発展の原動力に転化し、一体的な魅力ある都市空間を形成していこうと考え、総合計画の中核ともいえる「文化の回廊構想」を具体的に展開することとなった。

文化の回廊構想とは、眉山と中心市街地を囲んで推進されている四国縦貫自動車道、徳島南環状線・北環状線及び国道軸に沿って、海洋健康文化ゾーン、高等教育研究機関、新技術創造ゾーンなどの各種都市機能を適正に分散配置し、新たな環状の都市空間を創出することにより、中心市街地に集中する交通量を緩和することは勿論、土地利用の調和と快適な生活環境を確保し、活力ある都市の発展を図ろうとするものである。

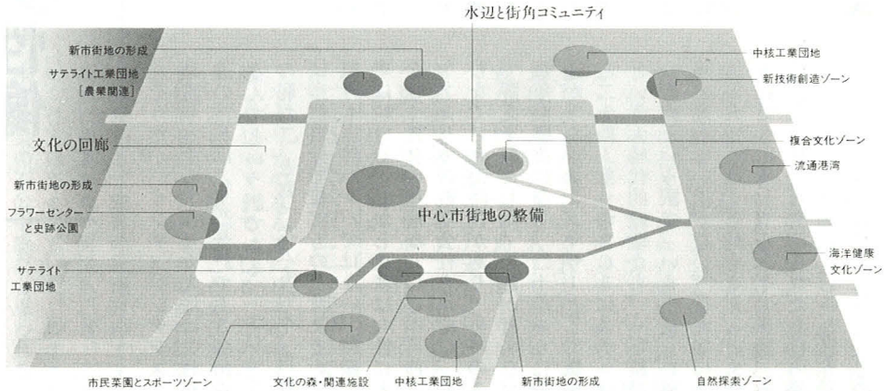
この構想の実現は、従来の中央依存、行政主導の都市づくりではなく、地域自らがその特性を生かした活性化の基本戦略を立て、自立を図ることにあり、徳島の持つ価値を再発見し、さらに新しい価値を創り出すことに発想を転換したものである。

さらに言えば、徳島市を新時代に適応した事業開発のフロンティアとして位置づけ、新事業の展開を内外に提案しながら企業の参加も求めて、産・学・官の協調体制のもとに具体化しようとするものである。

これらの中核となる事業が、二十一世紀への新しい業際科学の拠点・健康科学総合センターであり、徳島の海をいかしたヘルスケア型マリンリゾートシティの建設である。

これらの事業はいまようやくスタートしたばかりで、ジャンプしたもののどこへ着地するのか分からないながら徳島の二十一世紀を担う事業と考え、積極的に取り組んでいるのである。

徳島市の将来構想図



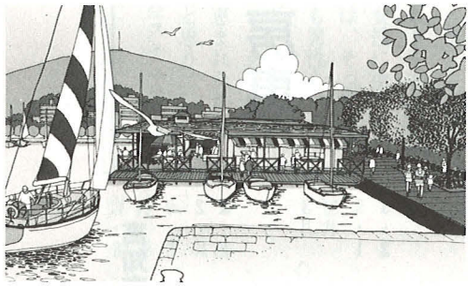
おわりに、そして新しい連携の輪を

徳島での街づくりの概略を説明したが、街づくりで大切なことは、地域の持つ優れた資産（ストック）をどれだけ活かし、魅力あるものにしていくかだと私は考えている。

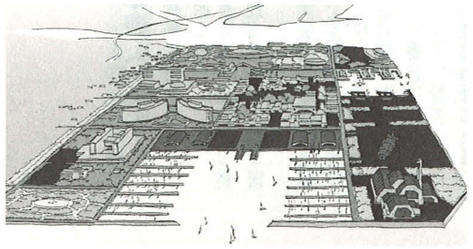
良い意味での都市間競争のなかで、互いの地域が共に活性化していかなければならない。

四国は一つというお題目にとらわれている限り、私たちは連携の輪を結ぶことはできないとすれば、それぞれの地域の差異を十分認識しながら、街づくりに意欲的に取り組む人々と連携の輪を広げていきたいと考えているのである。

繰り返して言えば、現在のような状況だからこそ、私たちが持っている自然環境などの地域固有の「資産」をただ単に守るだけでなく、新たな価値を付加し、大切な街づくりに活用し、次代に継承していかなければならないのである。


▲マリーナのイメージスケッチ

▼ヘルスケア型マリンリゾート・シティのイメージスケッチ



世界の中の日本〈下〉

アメリカに見る女性像と男性像

森木　房恵

逞しいアメリカの女性達

スチュワデスをしていて本当に良かったと思うのは、やはり世界中で素晴らしい人々に出会えることで、たった一度空で出会っただけで忘れ難い輝きを残してくれる人もいれば、長い苦労の果てに出来たいくつかの貴重な友情もある。最近は主にアメリカの友人達との付き合いの中から、強い女性像と優しい男性像が、くっきり浮かび上がってくるようで面白い。

アメリカの女友達は皆それぞれに逞しい。スチュワデスをやめて証券会社のマネジャーになったリリアン、童話作家になったトリシア、画家になった久子さん。ヨーコさんは、スチュワデスの傍ら不動産業にも精を出し、既に自ら五軒もコンドミニアム（台所家具付きの高級アパート）を所有している。ジルは二度の離婚にもめげず、自分の子供の他に韓国の孤児までアダプト（養子縁組）して育てている。いまさら力んでキャリアウーマンなどというのがおかしいくらい、皆自然に自分の仕事を柱にして生きている。私の仲間で、結婚を理由に仕事をやめた人は一人もいない。

女性の独立を支える社会環境

日本の結婚式の費用は、今や半分は親がもつのが常識だそうだが、インディペンデンス（独立・自立）を何より誇りとするアメリカ人にはこれが理解出来ない。自分達の言わば〝独立宣言〟である結婚を、親にさせてもらうなんてという訳である。「ホワッタ　シェイム（そんなの恥だ）」と言った人もいる。自分の独立資金・生活費は当然自分で稼ぐものと考えているから、仕事への取り組みも当然ハンパではない。結婚しても出産しても、仕事は続ける。しかし出産は女性にとって最大のハンデで、会社や社会の理解なしには不可能である。

アメリカの航空会社も以前は、妊娠と同時に退職を止むなくされた時代があり、当時のスチュワデスがこぞって訴えを起こした。これが有名なマクドナルド裁判で、数年前勝訴になり、二十年ぶりに飛ぶという昔の大先輩達がリターニングマザーとして職場復帰してきた。何しろ二十四人乗りのＤＣ３にスチュワデスは一人だけなどという大時代的経験から、一足跳びに四百人乗りのジャンボ機という訳で、いくら厳しい再訓練をしてきても勝手の違わない訳がない。彼女達にとって訓練・乗務・生活の大変革は、年齢も考えると大変の連続だろうと思う。それでも復帰してくるその意欲、そして何よりそれを可能にした社会と受け入れた会社の決断は、女性のハンデにとても優しく素晴らしいと思う。

私がアメリカに行くと、いつものびやかな自分らしさを取り戻せると感じるのも、こういう社会環境に守られ、誇りを持って働けるからこそだ。

家事もこなす男性達

女性の社会的逞しさと対照して、アメリカで決まって目につくことは男性の甲斐甲斐しさで、アメリカの男性は総じてとてもヘルプフルである。子供の時から相応にベッドメイキング、皿洗いなど、当り前に家事を手伝いながら育つので、やって当然という風に、どこのご主人も何気なく実によく働く。仕事の帰りにグロサリーショッピング（食事のための買物）をしている男性はザラだし、週末は大抵日曜大工をしたりしている。私の身の回りを見ても、ペイントの塗り替えやキチンの改造なんていうのは序の口で、ひと部屋増築した人、舟を作った人、軽飛行機を作った人、果ては家一軒全部建てた人までいる。さすが何もかも自分でやったパイオニアの子孫達だと、いつも感心する。

ハワイの私のコンドミニアムには洗濯機が無い。どこの家も、一階ロビーの奥にあるロンドリーに下りて来て洗濯する。ここで見かけるのが半分以上男性で、鼻歌など歌いながら陽気に「ハーイ！」と声をかけ、傍らのカウンターでドライヤーから出した洗濯物をサッサとたたんで行く。うちの主人もたまにはこうやって気軽に家事を分担してくれたらなあと、つい羨ましくなる。

この程度なら彼にもやって出来ないことはなさそうだが、どう転んでもとても真似出来そうもないと思うのが料理――なんとまあ、どこのご主人もスッと気軽に台所に立つことか！　ローストビーフサンドイッチを作ったり、ピザを焼いたりは誰でもする。自分の食事の用意は当然自分でするものと思っているところが何よりいい。友人を訪ねて、久し振りのお喋りに興じていると「サンドイッチ作ったけど食べる？」とご主人が呼んでくれる。日本ではこの程度でさえ考えられないのに、トシコさんの家に行った折は驚いた。私達が庭のプールで遊んでいる間に、ご主人のボブが、ご飯を炊きサラダにテリヤキステーキに、何とみそ汁まで作ってくれた（ボブは日系三世で軍の弁護士をしている）。この時は私の主人も一緒で、ボブはいい手本を示してくれたと感謝したものだったけれど、手本の効果、我が家では一向に無し。

サンフランシスコのトリシアのご主人も、ティピカル・カリフォルニア・ディナーと称しておいしいショートリブを料理してくれたし、デンバーのジルのご主人も、お得意の口八丁手八丁でシチューを作って楽しませてくれた（彼はラジオ局のＤＪ）。

ご主人達がこうだから、彼女達は安心してトリップ（一週間前後のフライト）に出られるのだ。女性が仕事を持つ場合、社会的サポート以上に、この男性の〝内助の功〟がいかに大きいか。

男女公平になる社会はいつ？

アメリカの友人達に日本の亭主関白のことを話したら、誰もがジョークで「ＯＫ、この次は日本の男に生まれよう」といい、彼らのことを日本の女友達に話したら、皆異口同音に「アメリカの女性は恵まれてるわネー」という。

はたして、先日の総理府のアンケートでは、この次も男性に生まれたい男性八二％、この次も女性に生まれたい女性五四％と出ていた。つまりこの差は、そっくり日本の社会の不公平感だと思われる。社会も男性もアメリカ並みになるのはいつの日か？

それでも私は日本が好きだし、家事はノータッチだけれど優しい主人と、明るく元気な子供に恵まれたから、この次もやっぱり女性に生まれてきたいと思う。

（ユナイテッド航空スチュワデス）

高知市近代年表（七）

明治三十七年（一九〇四）
2・10　日露戦争始まる
3・1　第九回総選挙（政友会百三十三人、憲政本党九十人、帝国党十九人）
3月　私立土佐女学校、高等女学校に昇格（現土佐女子高等学校）
5・1　黒岩涙香『精力主義』刊
5・2　堀詰～乗出、梅の辻～桟橋間に全国で十一番目に路面電車開通
7月　朝倉連隊、旅順方面に出征
9・1　土陽新聞より中央派が分かれ高知新聞創刊
10月　潮江桟橋落成
11・13　『平民新聞』に幸徳秋水、堺利彦が「共産党宣言」を訳載発禁に
12・21　日曜市本町より帯屋町に移る
12・23　日本聖公会高知講義所（現高知聖公会）永国寺町に設立

明治三十八年（一九〇五）
4・1　水上警察署、潮江に移転
5・1　平民社、五月一日茶話会開催（最初のメーデー）
9・5　日露ポーツマス条約調印
9・13　講和反対高知県民大会開催
10月　土佐セメント合資会社（のちの日本セメント高知工場）設立
◇この年、相生橋（北奉公人町～小高坂）撤去
◇柳原に忠魂碑建設される
◇乗合馬車営業取締規則制定

明治三十九年（一九〇六）
1・13　朝倉連隊帰還
2月　浦戸湾巡航船開業
7・20　藤崎朋之、高知市長に就任

10・3　竹村殖民商館に営業許可
12・9　最初の県営水力発電所・甫喜ケ峰発電所着工
◇この年、北奉公人町より常通寺橋間、南新町より城見町間に新道開設
◇大阪商船株式会社、阪神航路を独占

明治四十年（一九〇七）
1月　鈴木定直、知事に就任
2・24　第一回高知演芸会、中島町高知座で開催
3・22　社会改良会（板垣退助総裁）結成
6月　土佐製氷株式会社設立
7月　大東漁業株式会社設立
8・6　高知県漁船、出漁中暴風のため遭難、行方不明八百人余
11・1　電話交換局を高知郵便局に設置
◇この年、九反田に新道開設

明治四十一年（一九〇八）
2・5　戊申倶楽部組織される
3月　石原健三、知事に就任
4月　浦戸湾高知巡航社設立
5・15　第十回総選挙（政友会百八十七人、憲政本党七十人、大同倶楽部二十九人、猶興会二十九人）
7・2　土佐橋（浦戸町～種崎町）渡橋式挙行
12月　電車線路、伊野町まで延長
◇この年、中島町溜池の一部埋立実施

明治四十二年（一九〇九）
5・26　報徳学校を県感化院代用に指定
9・3　朝倉連隊満州守備の途につく
10・18　田岡嶺雲『明治叛臣伝』刊
11・3　高知市大火で百四十四戸焼失

国語表現の中から

山内志律子

場を踏むことは必要だとつくづく思う。教師であろうと、生徒であろうとそれは変わらない。むしろ生徒にとって場を踏ませることがどれだけ大切なことか、私のささやかな国語表現指導の中からもそのことは言える。

いつもめだたない、日陰にいるような子がある日、光を浴びる。うろたえながらも一生懸命自分を表現する、そのとき子どもは高揚感とともに自分の中に埋もれていた本当の力に気づく。光がおさまった後、子どもは本当に自分自身の力で輝き始める。いじめられている子、駄目だと思われている子、ひっそりと遠慮しているような子、あきらめているような子、みんなそれは他人の目を通して自分を見ているに過ぎない。教師の目、親の目、友達の目、他人の目……。そんな子にとっては頑張ることも、いじけることも、喜ぶことも、悲しむこともすべて一度他人の目を通しての出来事。自分自身の目に自信が持てなくなっている。みんなすべてを受け入れようとして逆に自分自身の心を見失って行く。そんなケースがなんと多いことだろうか。

表現活動には基本的に自分を解放する働きがある。自己表現というゆえんである。昔の人は「文は人なり」といったが、そのとおり否応なしに自分が立ち現れてくる。と同時に自己浄化とでも言うべき働きもある。本物の自分の可能性や力に自分自身が気づいて行く働きもある。もっともそれは単に書かせるだけではどうにもならない場合が多い。やむにやまれぬとか、のっぴきならぬ状況に追い込まれて初めて自己表現が嘘偽りのないものになるからである。

ただ、当り前だが、生徒自身のはじめの動機は不純である。功利的といってよい。図書券がほしい。国語で5がほしい。書かないと点に響く。それなりの成果がないとひどく落ち込むのは哀れでもある。失敗を極端に恐れる現代高校生の心理も邪魔をする。それをだましたりすかしたりしながら書かせていく中で、何人かは自己表現の糸口をつかむ。

例えばHは、国語は苦手、書くことも苦手な生徒であったが、受験のために仕方なく書く。しかし、ある時自分の意見を皆の前で発表し審査される機会があり、思いがけなく高知県代表となった。それからの彼の変貌は鮮やかである。全国大会では英語でスピーチをしなければならない。自分の論文を英文にし、必死でスピーチの丸暗記という、はたからみるとにわか仕込みの勉強を始めた。しかし、わずか一カ月足らずのうちに担当教師も驚くほどの伸びを示した。彼の本当の力がでてきたかどうかは分からないが、少なくとも彼は自信もでき、本当の意味での学力も伸びたのである。

シナリオ作成の授業の時、あれほど書くことが嫌いでそっぽを向いていた女の子たちが、なぜか燃えた。締め切りに間に合わせるために友達の家に泊り込みで頑張った。たかだか、授業の提出物に過ぎない。しかし、喜んで彼女たちはシナリオをつくることに燃えた。今度はそれを自分らでタイプに打ち直した。卒業時には記念にと持って行った。場を踏ませるというより場を設定したというべきだが、逆に言うとそんな場すらなかったということかも知れない。

自己表現の場を踏ませる過程の中でしかし本当に難しいのは、生徒の表現がどの程度本物かを見極めることである。その辺りの見切り方は難しいし、こういう時はこうだという公式があるわけでもない。ただ普段からの生徒との付き合いの中で出てくる勘のようなものであろう。聞き役に徹しながら付き合って行くと割合見えることはあるが、それでも難しいことには変わりがない。ともすれば自己満足に終わることがある。自分自身が自己表現をしないことにはそういう勘すら育ちはしないであろう。教師はどうも自分自身を語ることになる表現には臆病であることが多い。第三者の目を恐れることもあるし、独善的な姿勢が邪魔することもある。しかし、多少なりとも生徒に表現の指導をしようとするならば、教師自身の表現活動は不可欠ではなかろうかという思いが痛切にするのである。

（岡豊高等学校教諭）

私の風景

上森　陽

紅葉橋

私が少年の頃には、紅葉（もみじ）橋は「ガンキリ橋」と呼ばれていました。歩くとカタカタと鳴る、板でできたその橋の向こうは、一面の稲田と入道雲でした。

一九八七・八・二〇

スポーツ気分で音楽を！

横矢恵津子

「野球は、フルートを吹くのにとても良いんだよ」と言ったフルーティストがいた。

小学生の男の子にフルートを吹く姿勢について説明している時だった。

「バッターボックスでバットを構えるつもりで立ってごらん」なるほど、しっかり両足を安定させ、しかもリラックスして神経を集中する。その姿勢は楽譜に、聴衆に向かい、フルートを吹こうとする姿勢と共通している。

音楽も、スポーツの一種なのではないかと思うことがある。まがりなりにも、音楽を専門とする人間が、こんな事を言うと、世の真面目な芸術音楽愛好家から非難の声を浴びそうだが、〝バイオリンのおけいこ〟が大の苦手で、毎日筆山や鏡川を駆け回って真っ黒になって遊んでいたおてんば娘の私が、初めて知った音楽の楽しさは、スポーツの延長としての音楽にあったような気がする。

アンサンブルには、団体競技の楽しさがある。次は、どんなスピードで、どんなコースに攻撃をしかけて来るか。ゲームのペースに〇・一秒も乗り遅れてはいけないスピード感と、相手の出方を見ながらニュアンスを探ってゆく緊張感、うまく息が合った時の喜びは格別である。

スポーツも演奏も、全身の筋肉の運動である。それをいかに鍛え、いかにコントロールするかという訓練である事にかわりはない。

もっとも、当然の事ながら両者の違いは、音楽の場合その訓練の最終目的が「表現する事」であるところだろう。それこそが音楽の本当の楽しさであり難しさであることは言うまでもない。

都会に比べ、高知では文化的な刺激が少ない事実は否めない。

しかし、贅沢なくらいに恵まれた自然の中で、太陽と一緒になって丈夫な体と鋭い反射神経を育ててきた高知の子供達。「音楽なんてかったるい」と言う前に、ちょっと一口、スポーツ感覚の音楽をつまんでみては。

（フルート講師）

高知県ＢＢＳ連盟

少年と同じ目の高さで

北村　光良

ＢＢＳ会は、非行少年の問題に取り組んでいる青少年のボランティア団体です。

非行少年といわれている彼らにしても生まれながらの非行少年であるわけがなく、身近に真の愛情がなかったため、何かのはずみで暗い道に迷い込んでしまったのです。彼らの多くは、心を開いて話すことのできる相手を必要としています。

ＢＢＳ運動はBig Brothers and Sisters Movementの略称で、少年たちのともだちまたは兄や姉となって、一緒に悩み考え時には相談に乗りながら、彼らの立ち直りを手助けする運動です。

実践活動として、少年たちと一対一でともだち付き合いをする「ともだち活動」、野外活動などを通じて交流を図り共通の何かを得ようとする「グループワーク」、また「研さん活動」「非行防止活動」があり、現在県下では八地区会、百九人の会員が活動しています。

今年四月、ＢＢＳ運動の発足四十周年を記念した全国縦断キャラバン隊が県下を回り、ＢＢＳ運動への理解と非行の防止を呼びかけました。訪問先では盛大な歓迎や激励を受け、予想以上にＢＢＳ運動に対する期待感が強く、この運動の必要性を再認識し、少しでもこの期待に応えていこう、と決意しました。

活動資金の不足、行動力のある若い会員の減少など多くの悩みを抱えていますが、地道に活動を続けていく所存です。

（高知県ＢＢＳ連盟事務局長）
連絡先七三―五一一八
（高知保護観察所・中村）

おんち教室

大声出してストレス解消

大野けんじ

〈嫁に行く日が、来なけりゃいいと〜

三十畳余りの部屋に、元気のいい歌声がひびく。ここは高知市百石町にある高知市老人憩所。週一回のこの自主講座に通っている約五十名の生徒さんは、ほとんどが女性で六十歳以上の方ばかり、中には八十歳を越える元気なお年寄りも数名いる。

さて教えている内容は、分かりやすくいえばコピー。つまりプロの歌手の節まわしで本格的なカラオケをマスターしようというものだ。だから歌によってはかなり難しい場合もあるわけだが、そこが〝おんち教室〟の良いところ。調子はずれなどは全く気にせず、大きな声をはりあげて歌っている。歌は好きだが近所や家族が気になって大きな声が出せない。かといってカラオケ酒場に出かける機会もない。そういった方々にとってこの講座が格好のストレス解消の場となり、健康増進に役立っているようである。発声練習をしているときのあの若々しい声と明るい笑顔をみるたび「今日もお役に立てて良かった」と思う。

最後に生徒さん達から聞いたカラオケの効用をいくつか御紹介しましょう。「ゼンソクがなおった」「腹式呼吸法を覚えて息が楽になった」「歌を歌いはじめて性格が明るくなった」「三十年以上歌ったことがなかったので周囲の人がアッと驚いた」などなど。あなたも是非一度〝おんち教室〟へおいで下さい。六十歳未満お断りになっていますが―。

（ＫＥＮミュージックスクール主宰）
連絡先三一―三三二四（高知市老人憩所）

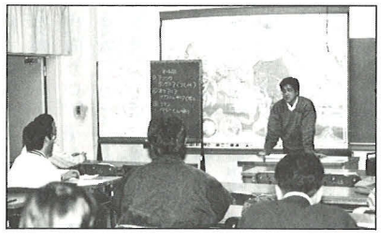
青年海外協力隊高知県ＯＢ会

異文化理解を目指して

山崎　啓一

青年海外協力隊は、日本青年の開発途上国への技術協力を目的として、昭和四十年に発足した政府事業である。

現在迄に本県出身者五十名を含め七千名が三十八カ国へ派遣されている。隊員に選考されると、国内で三カ月の訓練（国際情勢・言葉）を経て、二年間を途上国の人として生活することになる。隊員は任国政府機関等の職員として国造りにあたるが、その活動と生活を通して教える事より学ぶ事が多い。異文化の壁の克服がそれである。赴任当初は言葉の壁であり、次に常識の壁、宗教の壁と次々にハードルを越えることになる。このハードルを乗り越え相互理解をはかり、かつ日本人としての主体性を発揮することなくして、海外ボランティア活動は出来ない。



そして任期を終え帰国して、さらに強烈な異文化を日本の中に見いだすことがある。このカルチャーショックこそ、世界の常識の眼で見た日本の姿なのかも知れない。

私達の会は協力隊を経験した者の集まりで、体験を風化させることなくこの体験をより多くの人に伝え、隊員を発掘し支援する為に結成された。年間事業として帰国隊員報告会、パネル展、途上国の青年招聘等を実施している。

今後地方の民間ベースでの国際交流を目標として、宇宙船地球号が平和な軌道を辿るよう見守っていきたい。

（青年海外協力隊高知県ＯＢ会会長）
連絡先三二―一一八〇
（事務局・楠瀬）

とんちゃん新聞

酒場から生まれた文化

吉本　健児

とんちゃん新聞の創刊は昭和四十一年です。そのころ私の店は、若い詩人や絵描きさん達のたまり場のようになっていました。

とんちゃん新聞は、この若い人達の情熱のはけ口として生まれたものです。

別にこれといった目的があってはじめたものではありませんが、結果的には、店の宣伝紙となり、県外からのお客様からも喜ばれてきました。

最初は隔月刊で出していましたが、いまは不定期刊にして、年四、五回、のんびりやっています。

随筆、詩、絵画、短歌、俳句、お色気談義など原稿は多彩で、それぞれに味があり、面白いと思いますが、中でも強く印象に残っているのは、故大野武夫先生をしのぶ号です。まだご健在であられた川村源七先生の音頭で、大野先生ゆかりの五十人の方が集まり、特集号のために追悼座談会をして下さいました。反響も大きく、百十三通のお便りをいただきました。故人の偉大さを今更のように教えられたことでした。

とんちゃん新聞を今日まで続けてくることが出来たのは、創刊いらい稿料なしの愛情執筆で原稿やカットをお寄せ下さいました諸先生方のお蔭です。心からのお礼を申し上げます。

なお、これからもつづけます。新しい方もどしどしご登場下さいませ。よろしくおねがいいたします。

（とんちゃん新聞発行人）
連絡先　夜二三―七七七三

おじいちゃんのいかり

朝倉小学校５年　正木　哲宏

「あっ」
おじいちゃんのあみ戸に
かとりせんこうであなをあけた
なんとかごまかしているうちに
「せっかくはりかえたのに」
おじいちゃんはカンカンだ
みるみるうちに
顔が赤くなっていく
まわりの空気が
熱くかんじられる
いいわけをすると
何倍も熱くかんじられる
とうとうげんかいがきたのだ
もう赤くはならなかったが
空気がどんどんどんどん
熱くかんじる
まるで空気におこられているようだ

風伯

眠る計画書

〝むらおこし〟〝まちづくり〟あるいは〝○○基本計画〟と、このところ自治体における計画づくりが盛んである。計画は、その作成過程が重要で、その中で組織構成員個々の仕事へのモチベーション（動機づけ）をより高次のものに誘う。従って、計画づくりはその全過程を通じて、能動的職員づくりと職場モラールの高揚をもたらす。

一方、市民にとって計画は計画書という明文化された形をとるために、行政情報の公開という民主主義の具現化となり、政策への参加と批判を容易にし、市民自治の安定性をもたらすことになる。

しかし、である。ある行政マンの嘆きを聞こう。彼は次のようにいう。

配布されてくるおびただしい量の官庁計画書を見るたびに、仕事は「かくあらねば」と思い「かくあろう」と決意するのだが、やがてその思いは、容易ならざる作業過程に消沈し、計画は別世界の産物にして凡夫の及ばざるものだと諦めることもまた多い。そして計画書はあたかもそれが宿命であるかのように、書棚の奥深く格納され二度と日の目を見ることはない。

問題はその後の彼である。誰かが〝計画の必要性〟を言おうものなら、生理的嫌悪を催し、「理屈で仕事が進むか！」と一喝する自分に気づくことになる。凡夫たる彼がその職場の上司である場合、部下は不幸である。というのも計画とか計画「的」とかは、人間と他の生き物を区分する物差しであり、その部下は人間性を抑圧されかねないからである。

見る限り、そういう風景が多いと思うのは筆者の邪推であろうか。（方寸）

第9回 全国文化行政シンポジウム開催

文化の視点から行政を問い直そうとしている全国の自治体の参加により、毎年開催されている「全国文化行政シンポジウム」が、本年は高知で開かれます。本年のテーマは『ムラおこし・文化おこし』で、開催要項は次のとおりです。

●主催　全国文化行政会議
●共催　第九回全国文化行政シンポジウム四国地区実行委員会（徳島県・香川県・愛媛県・高知県・高知県教育委員会・高知新聞社・高知市文化振興事業団）
●プログラム
▼10月1日(木)　RKCホール
18：00　文化講演会　皆川博子（作家）
19：30　四国地区芸能フェスティバル
出演　池田町川崎獅子太鼓保存会
綾南親子獅子舞保存会
大三島町野々江乱獅子保存会
佐喜浜八幡宮古式行事保存会
入河内獅子舞保存会
山北棒踊り保存会
▼10月2日(金)　RKCホール
9：00　パネルディスカッション
コーディネーター　高橋秀雄（文化庁伝統文化課主任文化財調査官）
パネリスト　小島美子（歴史民俗博物館民俗研究部教授）
菊池啓（岩手県遠野市教育長）
松野精（㈱CDI）
依光裕（RKC高知放送企画事業局次長兼企画部長）
端信行（国立民族学博物館助教授）
14：00　観光史跡めぐり
●参加料　三〇〇〇円（申し込み〆切九月十日）
●問い合わせ先　高知県教育委員会文化振興課内・全国文化行政シンポジウム四国地区実行委員会☎21-4761

自由民権百年 第三回全国集会

〔十一月二十一日～二十三日・高知市〕

自由民権と現代

歴史を学び、研究し、創造するために

■第一日　十一月二十一日(土)
●史跡探訪―高知市内半日コース
●開会集会
●民権市民の夕べ―映画『自由は土佐の山間より』と飯沢匡の「日本人の笑い」
■第二日　十一月二十二日(日)
●研究発表と討論
●座談会「自由民権と現代」、他
■第三日　十一月二十三日(月)
●史跡探訪
■問い合わせ先
自由民権百年第三回全国集会実行委員会事務局
高知市本町五丁目二番三号高知市民図書館内☎(八八)三六三二(代)

全国集会記念出版　―事業団刊

土佐自由民権資料集

外崎光広編　A5判・約320頁　予価3000円

土佐の自由民権に関する基本的資料を事件別に分類、収録。民権研究の手がかりとなる重要な資料集成、十一月上旬発行予定。

◆「こどもの本を語る第二回高知大会」を七月二十六日(日)、潮江市民図書館で開催（同大会実行委主催・事業団共催）。当日は四分科会での討議の後、原田奈翁雄氏「何のために本を出すのか」と赤木かん子氏「本の探偵かけある記」の記念講演が行われました。

◆第二回文化都市づくりセミナーを八月九日(日)、高知共済会館で開催（事業団主催）。福岡県柳川市国土調査課・広松伝氏の講演「こうすれば清流はよみがえる―水辺再生と住民参加」と映画『柳川堀割物語』を上映し、水と人間とのかかわりについて考えました。

◆「大島渚　REAL TIME SUMMER」が八月二十二日(土)、県民文化ホール・グリーンで開催されました（大島渚を呼ぶ会主催・事業団共催）。映画監督大島渚氏の講演「映画を通して見た世界」の後、高知ロケ作品『少年』が上映され好評を博しました。

◆国際居住年記念シンポジウム「風土とすまい」を八月二十八日(金)、高知会館で開催（高知県建築士会主催・事業団他共催）。内田祥哉明大教授、太田邦夫東洋大教授の基調講演の後、シンポジウムが開かれました。

◆第十回サマーセミナー（高知県建築士会青年部・事業団他共催）が、建築家長谷川逸子氏、東洋大助教授布野修司氏を講師に迎え、八月二十九日(土)竹林寺で開催されました。

〈事業団の出版物〉

土佐の芸能

高木啓夫著　定価四八〇〇円

現在、高知県下に伝わる伝統芸能を網羅。それぞれを神楽、獅子舞など十五項目に分類、詳説を施した芸能百科。

中山高陽

清水孝之著　定価三八〇〇円

藩政期、土佐の生んだ江戸南画の祖・中山高陽の全容を明らかにした労作。あわせて書翰集、資料集、年譜を収載。

高知県方言辞典

土居重俊　浜田数義　編　定価六〇〇〇円

日常何気無く使っている言葉から古語に至る土佐方言を採録、意味と成り立ちを解明した土佐言葉の集大成。

おらんくことばてんこもり

定価八〇〇円

方言辞典に採録した方言約一万四千語が一目で分かる、B全両面ポスター。

明日を創る（高知レポート）

大谷英二著　定価一〇〇〇円

高知の〈まちづくり〉に関する十七の計画書・提言を要約、解説した資料集。

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780　高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8-14869